

「大村はま」の教職論についての一考察

A discussion in theories of teachers of Hama Oomura

芝垣 正光

SHIBAGAKI Masamitsu

Abstract: The present study was discussed the Oomura's theory of teacher. The school of Oomura did not put the class teacher for the treating teacher's subordinates kindly. The qualifications of the teachers were the study. The ideas were important in 20 years old. The teacher did not tell the children the reading in the home work. The teacher did not tell the children the composition at home. When he and she educated the composition at school, they did not calculate the money, and made a preliminary investigation of the next teaching. When the children could not be up the results in study, the teachers had to have the responsibility. When the children made a noise, the teacher did not tell them 'be quiet'. That was the responsibility of the teachers. The teachers like the children. Then, the teachers reflect on him and her conduct that. The famous person of the culture did not be the specialist of the education. The teachers discover the teaching materials from the novels and the News Papers. The teachers had to be the figure of the Buddha. The pupils and the teaching were teacher's long-cherished desire objects. The real teacher could reflect on him and her-self.

Keywords: Hama Oomura, theory of teacher, one discussion

1. はじめに

これまで近代日本を代表する福沢¹⁾、沢柳²⁾、野口³⁾、倉橋⁴⁾、小原⁵⁾の教職論があった。近年、戦前・戦後を通して高等女学校・新制中学校の国語科教師であった大村の教職論が出された。

大村は東京女子大学を卒業した。子どもの頃から将来教師になることを希望して、大学卒業後1928年に信州（現在長野県）の高等女学校で、国語科教師になった。戦後、長野県から東京都へ、新制中学校へ転任した。校長等の管理職には向かないと考え、43年間にわたって生涯一教師として生徒を教育した。多数の著書⁶⁾を書いた。そこで、教師はいかにあるべきかと言う教職論を記述した。本稿では、このような大村の教職論について、一

考察を試みた。残念ながら、大村は2005年4月に亡くなった。

2. 担任制

大村が信州（現在長野県）で教師になった時、学級ごとに担任を置かなかった⁷⁾。1学年、3クラス、担任5人であった。現在の学級ごとに担任を置く長所・短所は、前者が責任を持てる、後者はあぶれる教師が出る。担任を持たない教師に対する子どもの目が、希薄になる。

大村の教師論は、クラス担任を持たない教師に、生徒が教師を見る時、平等に見ない。生徒はいずれの教師に対しても同じ気持ちが向かない。教師に上下をつけるようなことがあれば、本当の教育

は出来ない。教師が平等に扱われていなければ、教師を軽んじる生徒が出て来る。

一般的に現在の小学校では、一人の教師が一学級の全教科を担当する学級担任制である。中学校では、専門教科のみ担当する教科担任制である。一つの学級において、教科ごとに別々の教師が授業を行う⁸⁾。個々の子どもに応じて教育するのではなく、一人の教師が、約 30 名の子どもを一斉に効率よく授業を行って来た。

大村の学級ごとに担任を置かない制度と、現在の学級担任制度はいずれも一長一短がある。

3. 教師の資格

大村は研究することは「教師」の資格であるといった⁹⁾。研究しない理由は、前進する気持がない。研究は苦しい。子どもは一步でも前進したいと行動する。教師は、子どもと同じ世界にいる。同じ世界にいない教師は、教師として失格である。子どもと一緒に遊んでいれば良いと言うのは安易な考えだ。研究をして、子どもと同じように伸びる気持ちを持つことが、教師の資格だと。

具体的には、毎月一回研究授業を行う。いずれの教師も使用したことのない教材で、教科書に載っていないもので。方法は、今まで一度も使用したことがないもので。古い方法は老いてしまう。この古い方法では、教師を辞めるべきだ。ベテランになっても研究を行うように。忙しいから研究する暇がないは、言い訳である。大切なのは、研究することで、子どもと同じ世界にいることである。

しかし、現実には教師は、大村が言った研究が出来ない。学校のみで仕事が終わらず、自宅に持ち帰って仕事を行っている。さらに、不登校児への対応、クラブ活動顧問になると、朝練習、土日練習に子どもと一緒に付き合う。とても、研究が出来ない教師が多い。このように研究が出来ないで持って、教師の資格がないと結論するには、言い過ぎかもしれない。

4. 20 歳代のアイデアを大切に

大村は 25 歳以上のアイデアはだめだと言った¹⁰⁾。25 歳を超えると、これまで考えたアイデアは深まって円熟になるが、新しい良いアイデアは出てこない。大村は信州（現在長野県）の教師時代、アイデアを次々に考え、蓄積した。未熟な形で出発し、一つ一つ完成させて行く間に、43 年間に過ぎた。急に浮かんだアイデアを書き留めた。そして、常に工夫をした。何か新しい工夫を行ってみようと考えていると、新しいアイデアが浮かんだ。急激な変化の中で生きている子どもを、教師は手の中に持っている。この大切な子どもに対して、大きな責任を負っている。

大村が言った 25 歳の区切りは、とりあえず若い時に考えたアイデアが良いと言うことである。ノベル賞を取った人達も、そのための研究は 20 歳代で行ったものであることが多い。特に、著者が特別支援学校で経験したのは、若い教師が常に新しいアイデアで教育に当たっていた。アイデアがないと、子ども達は学んでくれなかった。

5. 教えない教師

大村は、教師は「読んで来ましたか」と言う検察官になっていると言った¹¹⁾。大村は「教えない」教師が多くいると言った。学校は学ぶ場所であり、家庭は生活の場所である。「読んで来ましたか」と言うのは、家庭が学ぶ場所になり、学校が検査室になっている。

読む学習では、「読むこと」が一番大切だ。最初の「読み」を見ていない場合、誰が早いか、誰が一行飛ばすか、分からない。これを知らないで、どのように教育するのか。子どもによって五行くらい読んで飽きる。集中力がない。一字一字見ている。ひとまとまりとして捉える子。さまざまな子がいる。早く黙読出来るように教育する。

最初に文章を読む感動を教える。「おもしろい」と思わせる。学校に来た時は二度目で、しかも一時間に何度も読むと感動がなくなる。ゆえに、「読んで来ましたか」は禁句であると。

未来を創る人を教育している。教師を超えて行く人を教育している。「読んで来ましたか」と、感動のない授業は、何も建設していないと大村は言った。

しかし、現実には学校も、家庭も勉強する場所になっている。特に、有名な進学中学校を受験する小学生は、学校で教師の話は聞いていなくても、家庭と塾で猛勉強をする。大村が言う家庭は生活の場所となっていない。

6. 黙って書かせる批評家

大村は、「教師は作文を家で書かせるな」と言った¹²⁾。学校で書かせる時、悪い教師はお金の計算をし、次の授業の下調べをする。これは作文を教えていないことである。

作文を書けない子どもに対して、「その先を書いてごらん」と隣に書いてやれば良い。止まっている子どもに対して、「その木は何のきでしたか」とか、「そこで何を見ましたか」とその横に書いてやる。子どもは見たものを思い出して書く。そして、さらに文章を書いて行く。書けない子どもは、教師が来て何とかしてくれると無意識に、心から待っている。

子どもが作文を書けないのは、教師の恥である。子どもが書いたものを、下手だ、上手だと言うのは、指導者でない。批評家である。これは、教師としてすべきでない。子どもが書けなくなったのは、教師が失敗したと言うことである。教師は何も書けないでいる生徒を、書かせるようにする専門職である。

著者が教育を受けた昔の小中学校(1950-1960)では、子どもが作文を書いている授業時間には、大村が言ったように教師は決まってお金の計算をし、次の授業の下調べをしていた。大村が言った教えない教師が多くいた。

7. 無責任な教師

大村は、生徒の成績が上がらない時に、「一生懸命に指導したのですが」と言う教師が多いと言っ

た¹³⁾。もし会社の例であれば、失敗し、会社に損をかけた時、「課長、済みません。しかし、一生懸命努力しました」と言ったら、どのような返答があるか。「ばかなことを言うな」と叱られる。教師はこのような言葉を言うべきでない。生徒の成績が上がらない責任は、教師自らが取るべきである。教師と言う専門職として責任を取る。

子どもが学校で怪我をした時、「よく注意していたのですが」、教室の窓を閉め忘れた時、「閉めなさいと言ったのですが」と教師は言う。これらの責任を教師は逃れられない。全て教師が責任を取るべきであると大村は言った。

「貴方のお子さんは、勉強が足りませんね」と、言う教師がいると大村は言った。教師は甘い世界にいる。母親は恐縮して、家で勉強させますと答える。相手を責めても、子ども・母親は、怒らないようになっている。教師の方が悪くても分からない。教師は教育の専門家であるから、生徒に力をつけなければならない。

著者が教育を受けた昔の小中学校(1950-1960)では、成績が上がらない子どもに対して、教師は母親に、「一生懸命に指導したのですが」、「お子さんは、勉強がたりませんね」と言った。これが一般的な教師だった。大村はこれらの教師を戒めた。

8. 本当の教師

大村は本当の教師について次のように言った¹⁴⁾。本当に良い仕事をしているか、厳しく自己規制が出来る人が本当の教師である。いつでも自分を責め、子どもに確実な力をつけ、責任を全部取って行く人である。非常に厳しさのいる職業である。子どもが好き、温かい心さえあれば良いと言うような甘い考えではいけない。落伍者を作らない、大切な頭脳を伸ばす。国家の宝となる大事な人を伸ばす。一斉授業も、グループ授業も個人を良く生かすために編成する。個人を伸ばすことが大切である。子どもより先に生まれた者が教師になっているだけである。教師を乗り越えて、日本を建設する人を教育している。教師程度のところ

に止まった子どもばかりであれば、日本は滅びると、教師を乗り越えて進んで、悪いことに正しく批判し、反発するような人に育てる。

この大村の言った教師論は大切である。子どもは将来、総理大臣、Nobel 賞受賞者、宇宙飛行士、医師、企業社長、あるいはプロ野球・サッカー選手、オリンピック金メダリスト等になる可能性を持っている。教師はこのような子どもを教育している。

大村は卒業生に対して、教師のことは忘れてほしいと言った。自分の道をどんどん進んでほしいと。新しい世界で、新しい友人を持って、新しい教師について、自分の道をどんどん開拓して行ってほしいと、子どもを見送った。

これに対して、著者の教育経験から違った意見があった。卒業後社会人になった教え子が、近況を知らせて来たり、年賀状をくれたりする。これは教師にとって大変ありがたい。また、結婚式に招待してくれる。これも、大変ありがたい。ある教師は、親子二代にわたって教育した教え子となったと言った。

9. 動機はともあれ

教師の出発が「でもやろうか」「しかできない」と、言う考えだった人も、関係なく、未来の建設に進んでいることが大切だと大村が言った¹⁵⁾。

これに対して、動機はともあれ、教師になった多くは、歳が経るに従って教師が天職のようになって行く。著者も、大村が言ったように、子どもの頃から教師になることを希望し、そして現在まで教師を続けている。

10. 子どもが好きだけではいけない

大村は「子どもが好き」は、親バカに対して先生バカと言った¹⁶⁾。子どもが好きだから教師になった。悪くはない。しかし、それを反省しなくてはいけない。子どもを愛しながら、教育を行って行く。幸福な世界に入った気がする。世の中全体を考えた時、幸ばかりでない。何か見落とししてい

る。教師は何をすべきか。子ども一人で生きて行く人間に鍛えるのが、教師の職業であると（大村が中学校教師だった戦後の当時、中学校卒業と同時に就職した者が多かった）。何十年か先を見通して、子ども時代の今、この日に行わなければならないことを教える。教師自身の幸福感に酔ってしまい、「いい人」であっても良くない。これは教師と言う専門職でない。

これについて、教師は常に子どもが好きでなければならない。しかし、大村はこれを戒めた。子どもを愛しながら教育していると、幸福感に入ると、子どもの将来のことを忘れてしまう。しかし、著者の教育経験から、愛情を持って教育に当たると、子どもがそれに答えてくれた。

11. 書かせる工夫、教材例

教養ある和尚は、必ずしも教育者と言えないと言った¹⁷⁾。修学旅行で比叡山に行った。二千年前の法灯見学をした。和尚は大変厳しく生徒に接した。説教中、一切私語を許さなかった。生徒は足がしびれた。和尚の説教は良い話だったが、生徒は頭に何も残らなかった。「おもしろい」と言うことが何もないのが困ると。

それから奈良に行った。あるお寺で、和尚は大変おもしろく解説をした。その間始めから終わりまで、生徒は皆笑って聞いた。最後に絵葉書や写真の宣伝があり、これを買って下さいと。信仰の立場、芸術の鑑賞の立場から、何か生徒の心に訴えがなくて良いのかと。

次に、京都の枯山水を見た。和尚はおもしろい解説をした。このように良い学校の生徒が日本中にいたら、幸福だと言った。おだてて、喜ばせて何も味わいと言うものが受け取れなかった。

説教めいた解説や露骨な指示でなく作文を書かせるには、やはり素人（高名な和尚を含む）では出来ない。教師と言う専門職がどうしても必要である。ただ教養がある人と言うだけでは、これが出来ない。

12. 教材の発見

教師は教材発見のために新聞記事、小説を常に注意しなければならないと言った¹⁸⁾。元パトカーの運転手が、定年退職後個人タクシーの運転手をした。しかし、運転がうまくいかず辞めた。この原因を子どもに考えさせた。答えは、パトカーの運転手だった時は、他の車が全て用心して避けてくれた。しかし、個人タクシーの運転手になったら、今にもぶつかりそうに他の車が近寄り、危なくて運転が出来なかった。

小説からも教材になった。小説菊池寛「形」槍の名人中村新兵衛の話。中村は赤い陣羽織を着て、戦場において敵を次々に槍で倒して、手柄を立てた。ある戦場において、若侍が初陣なので、赤い陣羽織を貸してほしいと。借りた若侍は大変な働きで手柄を立てた。しかし、中村は黒の陣羽織を着て戦場に行、脇腹を刺されて死んだ。なぜ若侍が手柄を立て、中村が死んだか、その原因を生徒達に聞いた。答えは、これまでの戦で赤い陣羽織を着た侍は大変強いと、敵は恐れていた。赤い陣羽織を着た若侍は大変強く映り、敵は向かって行くことが出来なかった。ところが、黒い陣羽織を着た者は、強いとは敵には映らなかった。そして、敵は中村に恐れず向かった。

この小説「形」と、新聞記事のパトカーの運転手は、つながった教材となったと大村は言った。

このように著者も大村と同様小説、新聞記事を教材として利用して来た。特に、新聞記事は教育問題、新しい教育方法等が豊富だ。最近新聞記事として出された新しい教育実践(教育方法)には、朝日新聞環境教育プロジェクト「地球教室」の取組の中に、地球教室出張授業があった。環境活動に注力する企業と朝日新聞社の記者達が、全国の小学校8校で合同出張授業を開始した。国内外の環境問題を伝えた。

反転授業は、教室で説明を聞き、家で課題に取り組むのを「反転」させる教育実践(教育方法)であった。学校で受けた授業の説明を、自宅でタブレット端末やPC等を使って動画で視聴する。

教室では応用問題等に取り組む。

タブレットによる通信教育の教育実践(教育方法)は、子どもが教材を自習し解答を送ると、添削されて返って来た。タブレット端末の導入により、画面を触れ、動画を見て、音声を聞くことで学ぶ意欲が出る。

道德教育の新教材の検定教科書が整うまで、小中学校で4月から使う新教材「私たちの道德」が、文科省によって14日に発表された。

4・4・4制・子どもの順応、公立小中一貫校の教育実践(教育方法)、小から英語授業の教育実践(教育方法)、ホームスクールの教育実践(教育方法)の記事があった。

13. 教師の仕事の成果

「仏様の指」について、大村は次のように記述した¹⁹⁾。ある農夫が荷物をたくさん積んだ荷車を引いていた。その時、荷車が泥のぬかるみにはまった。農夫が一生懸命に努力したが、荷車は動かなかった。そこで、仏様が少し指でその荷車に触れられた。そうすると、荷車が泥のぬかるみから出て、動き出した。農夫は仏様の力があつたことは、知らない。自分が努力して、荷車を動かしたと思った。仏様の力で荷車が動いたと知ったら、農夫は仏様に感謝をしたであろう。しかし、生きて行く力は、非常に減少した。

このような例から、大村が言った。仏様の指のような存在でありたいと。考えたことを気付かずに、生徒自らの努力・能力と思い、自分のみがき上げた実力であると思つて、次の時代を背負つて進んでくれと。仏様の指のような教育技術を持ちたいと。

これについて、一般の教師は仏様の指のように教育していない。このように教育するには、特別な教育技術が必要である。

同じく「教師の本懐」について、大村は次のように記述した。幸田文の随筆で、娘の結婚の際、娘が母に「これまで育てて下さり、心から感謝します」と言った。これに対して、母は「お礼は言

わなくて良い」と言った。それは、子を育てるのが母の生きが이었다。

この例から、大村は言った。生徒がいて、教えることができ、それが教師の本懐であると。生徒を教育することによって、教師の生活があった。大村と言う人間がこの世にいた証だと。この世に生きた意味があった。私の努力が報いられたと。

著者も大村が言うように、学生がいて、教師の私がいると感謝している。講義中私語・騒いでいるのは、教師に責任があつて、学生には責任がない。それは、教師の教材、授業構成、話し方が悪いからである。

14. まとめ

これまで近代日本を代表する福沢、沢柳、野口、倉橋、小原の教職論があった。近年、戦前・戦後を通して高等女学校・新制中学校の国語科教師であった大村の教職論が出された。そこで本稿では、この大村の教職論について、一考察を試みた。

教師を大切にするために、学級ごとに担任を置けなかった。教師の資格は研究であった。20代のアイデアを大切に。「読んで来ましたか」と言う検査官にならないように。作文を家で書かせる、学校で書かせた時、お金の計算、次の授業の下調べをしてはいけない。子どもの成績が上がらないのは、子どもの責任でなく、教師の責任だ。同様に私語・騒ぐのは、子どもの責任でなく、教師の責任だ。「子どもが好き」だけの教師は反省しなければならない。高名な教養人が必ずしも教育の専門家ではない。教材の発見は、小説・新聞記事から。教師は仏様の指のような存在でなければならない。生徒がいて、教えることが出来て、それが教師の本懐だ。本当の教師は厳しく自己規制ができる人である。等々論じた。

引用文献・図書

- 1) 会田倉吉：福沢諭吉；吉川弘文館、(1987)
小泉信三：福沢諭吉；岩波書店、(1966)
- 2) 小原國芳・小林健三：柳澤教育—その生涯と

- 思想；玉川大学出版部、(1961)
- 3) 石橋哲成：日本教育の開拓者 野口援太郎 1、2、3：世界教育連盟日本支部「教育新世界」41号・42号・43号、(1997-1998)
- 4) 湯川喜津美：倉橋惣三の人間学的教育学；玉川大学出版部、pp.60-80、(1999)
- 5) 小原國芳：教育とわが生涯；南日本新聞社、(1994)
- 6) 大村はま：教師大村はま 96歳の仕事；小学館、(2003a)
大村はま：考えることの教育；ちくま新書、(2003b)
大村はま：教育に魅力を；人と教育双書、(2005a)
大村はま：授業を創る：人と教育双書、(2005b)
大村はま：灯し続けることば；小学館、(2004)
大村はま：日本の教師に伝えたいこと；ちくま学芸文庫、(2006)
- 7) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.16-20、(2007)
- 8) 樋口直宏：教育方法論、学習指導の形態、樋口直宏・林尚示・牛尾直行、編著「教育課程論・教育方法論」；学事出版、(2013)
- 9) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.20-26、(2007)
- 10) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.26-29、(2007)
- 11) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.29-38、(2007)
- 12) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.39-51、(2007)
- 13) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.45-51、(2007)
- 14) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.51-59、(2007)
- 15) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.73-75、(2007)
- 16) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.75-79、(2007)

- 1 7) 大村はま：教えるということ；共文社、
pp.95-103、(2007)
- 1 8) 大村はま：教えるということ；共文社、
pp.112-115、(2007)
- 1 9) 大村はま：教えるということ；共文社、
pp.129-133、(2007)

参考図書

- 1) 日本民間教育研究団体連絡会：現代教師論；
教育史料出版会、(1988)
- 2) 佐島群己・黒岩純子：教職論；学文社、(2005)
- 3) 谷田貝公昭・林邦雄・成田國英：教師論；一
藝社、(2010)
- 4) 米山弘：教師論；玉川出版部、(2007)